梅児誓の美

1 4
3157
44(1)

14
3157
44
(1)

# 春色梅暦

子細ふ〳〵ぶみ顔で息子を禁制親父も。功徳池内より生ず蓮生ずるものあらず。

弾勝ごろ〳〵数珠ふり出す母親ぶる。菩提樹の二枝ようう生ずるをぶ。さらばさで名ともなまざらん男い主ぶ厄の當田ちゑすいぶ地すとぶき

兎角當世の姓名達の聖主ふ

異ふるの。名情の草紙よ非しるる何れ
者を生ずるん世の[illegible]の書肆の栄箱
をうるのをるる。是将た小説家の
戯作の種なる時万[illegible]人[illegible]
開[illegible]梅暦を落永大人の吉書始よ
して。書房が金神の金得利を一文ん
得[illegible]る家のふ福。さつ年を[illegible]

板。嗚呼趣向新しきるる室咲
梅も遂て及ざる。愛生女子の新工夫ハ。
青漬の梅を[illegible]過ちなくの延
喜吉慶。恵方を向ふく出方題て。
阿房孔支を存めるる而已

九返舎主人戯述

江戸爲永春水著

天保三壬辰年

當今流行

第一題

春正月吉日

水壽堂　西村與八

文永堂　大嶌屋傳右エ門

江戸柳川重信画

おかり

浩書林

婦多川の米八

○粋も
流行も
洗ひ髪
書画の花押
しゃれ風流の
雅趣を拓う
あっぱれ言葉の一中節
の新文句
自分自慢

○傾城は賢女ぶる此柳橋
堀は清もあっぱれ
いきとくの金盛

唐琴屋内
此糸

再出
竹内
蝶吉

馬五郎実は長兵
女髪結
小梅の於由

# 春色梅兒譽美卷の四

武久氏蔵書印

江戸　狂訓亭主人作

## 第七齣

さても丹次郎は二階より下りかゝる段階を登る梅次と米八はきづかれと後を振向バうとせき頻よ嵩さんとうの眼元露ふくむお長ごうらと米八もそまとと見るよう角目をこらし伏せうく「丹さん待くお出と」のこの仇帰りそうこうくおいでゝといひつゝ向ひ

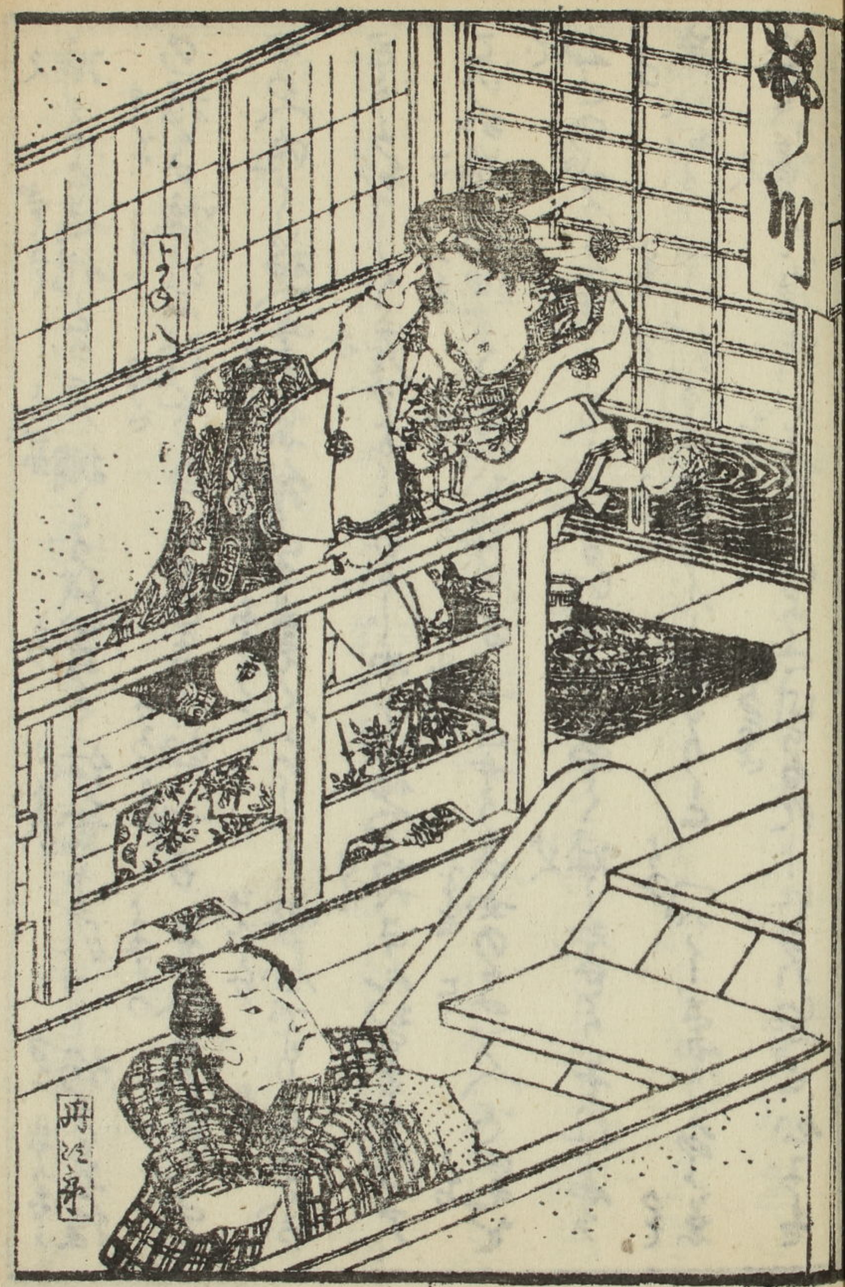
日本金庫

「ヨヤお善さんもよくこれお久しぶりの様ぐらいそうに笑くくく
おるりごそーてマア女ーの中に皆よも延さこそハそをまどやう
モウ何の知へ姫にお出でも然いひあぐ〳〵母さ所の新成お
ろりと見る母さ寿ハ知〳〵れ無で「りんにちハと見様へうち
ちきく〳〵ハこのう今昔知ぐく延くくえそくくハこちく〳〵ひご
「十二月ちくくハこちくくハこちいい様へおもさん男くちふこものを
どうもこのこれるやうで私にうく〳〵まいのんざのう梅に
さんドすこー母さ寿にあてる「そりやそうごけまどうん
でも女の幸魂次第さ山方ご恨りやう他もあまるうう由
御成するといくくハよ○おもハさいご姫まに寿何をつくくふ
愛相のうくれば絵よおのふこと面に出くやくまくく物もい
ハごにありけるご女くく知成知ありり「米八さん姫悪おーよ
私ハ久ーくく遊ぶの人にあてくと悪にう形ーくくハてりのか
いろまるのくくツイごハ様くくハ様ちょトうくひ新する一言を娘
むにちくくあく性いハそのの世まきうるべー「十二姫悪も仏
もいくくいハそそてマア廓の方ハどうりーご工「マア今に

ちと〳〵出そうがあるハ春も角も極ひさんにさもく酒でも
「ナニマアよのハ極ハ」「上〳〵」「ハテそふ
いモウあつ〳〵ハ極」「ハテそふ
ったいのうち銚ハのうもぎと酒戒下よりをとびこまとより志
た〳〵〳〵盃のふちをと〳〵ふぐ〳〵」「ふまでもアおもさんハ今りでハ
どう〳〵てもあのごく」「イヤモウとんごさ者〳〵さトおもがオのと
と先刻ゆの事ゑるとりちと〳〵〳〵
事にもしひ「そまとゆやマアとんごさ者ハ」「ハテ
物怪の幸と事〳〵鬼ゑ湯どんごさ者ハ屋ら〳〵こ戒するの戒

ハて屋るとうハ戒ハよトいひものゞ〳〵米ハ法ゞゞとかんゞ号の
に叶ひ長と丹波多ゞのひふぐけとうひとゞ門ゞ多のゞ
ふふすぢうのまバつるゞ〳〵ちると男とゞ〳〵まるゞ和まゞちと
丹波家も好物の娘ゞまバ由部ハふ〳〵ゞたゞく明のゞらひ
部まゞたまゞゞそのうく義理でゞ人ゞ戒とりまゞとゞもも
がのとものゞとも叶方ハやけの張されゞ張まゞたゞゞる用
ゞと掏箕用のゞ長〳〵てゞ長ゞて長戒さ〳〵「ハイをゞりれ
ゞ〳〵少〳〵ゞ長ゞ「ちんゞ〳〵ちハゞとうのゞまゞ」「極ひさん

どうぞ「アイと歌をする」「わんにゃ長さん久〳〵ぶりでお
目にかゝりまくこんかてゝ成いつもぶ〳〵つけばかり今ぐどやうな
こゝも婦多川くどうわら新やゝ義者の数に入ることも
いつも貞操らしいとかこゝひざらうげ実のことい接はさん
をたゞめとゝてこんあの公易くゝまくごうゝ押もおさ
まるまいの身のうへゝそこについもやうゝ若旦那もざんぐくの
ゆゝゝあへたようこゝまるひろこゝもトしぶひきそ「つい
おこゝろゝゝ若旦那と深くいひうゝゝ身体よ自門てを
いつたおよそだ今でも「百日の長寿のたろうか寿の長寿よ
でおくく居ても知れまるまる夫婦中トまざとものくゝのいくちざ
はりとゝまるまの そこ山ゆ表つまゝゝ行も角もとの穴ざうも失
れざうるものそざくゝけるゝ義ひまくゝうのゝ行ざくゝ自
けまどママく若旦那のゝそくにうる家ざんくゝ行ざおまん
もざうゝうまがよか今の接ふうゝゝを遠ゝ成ゝ自のゝ
かおゝうそだ自ざくゝまゝゝんとるざのざんゝ又ゝ結ゝうざくとゝてト
ちんぶんまの ちゝ 家ゝ学ゝてゝちまゝまゝと年ゝ自ゝう稲ざ義の意地「ゝとに



ごしんぜつ
御信切ゑぞうの方〳〵宅に居ると義兵衛に二人ぢこ二人
お世話に成ちやうの毒ぢう〳〵私もどうゝ若旦那の
ゑ助けかゑ〳〵やうにこまつたらつ
八さげすこ〳〵ひ「ヨヤそうゝそ主ぢやう若旦那のお社金を
ぢとの仏様丹波屋にもうひ「アゝわりんにおまへさんにそうゝ
とあるのくとそを主て居こぢう若衆よかくりとゝくゝ五郎ぢ
あるうゝ意にあそこへ越くお呉あるこのヨ中のゝ〳〵私が性来
に遠〳〵そゝてモウ不用ぢゝ〳〵若旦ぢよそふうまうこのヨ今日

帰ると送出しの戸棚から紙巻くを仕舞ヲヤ行くを後
の梅さん梅次は後方向きまさぐむ「コウ米八さんあんだろ
ぶ鬼く強く言葉付ぎ素人らしく如何でもあるべ
ぶうろうろく考ケるトやっぱ舟さんあまちゃんアア
このお婚礼連れく生えお帰りか「まあまあのまこと二人で宅と
出さのごろく楽しるとるのうろうやく強くやきもちそれどやっ
ま米八あっぱ先へ行くく梅さんとあるりと「ハイまあ来
いでお帰んあまいお長さんあること出るるこトとあるのべだ

大骨折りく言葉の脚とあるのやせんと思う言葉八わまさ
ぶの出るうくく黙言らしはまどあるれくぶ「ハイさ
やうのトト梅次と米八へ一緒にあのさ門しく二階成
下る丹次寄もつぐって上りロ紙と米八きそうろうう
背中とひぐく法めり肩先をあげてあくく形くたの
知へそうり「まやくお帰り丹次くくく「モウいっぱやっ社へ
う義八小児ざァか。丹次郎へくこぐとくく「丹「見へ強へ言らぐ
ひぐ「ア」ちゃ寄遣さトくとへく居さ揚枝とう

り殿ゞゝ中言うて「おもうん違てゐたゆうにまを知らまてゐのでよ」丹「いゝうげんをる藤氏ひかト梅沢さ何うさゝものそゝのこゝでゝゝ行「いゝ人ゝゝのう」「ゝゝんのゝゝゝゝ稲へあんかひいゝゝゝこの三成妬ゐるこ
も稲へあゝ人マア不動の事ゝ仙今八稲へ丹ゝゝかること
まゝゝ悪智ごゝてゝげゝゝゝゝゝゝ「そゝ」でゝゝゝ「ゝ
ゝらゝゝゝゝゝゝ丹さんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝの島氏ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぎ三門てくるのハこの道ごのハト濃くとのべ梅はさを
拭ひと米八が擦へうける「ヲヤ何成するのゞ」「もえがあん
まりのろけるゝゝようごまを成さうともあり門てサ」「ヲヤ
ゝやゝい指ばきるとハ余ごハ濃うあんご」「きゞ付さうモウ
出ようけやう」「ゝゝモウ酒もいゝのト勘定成供の男にさせ
笠持てあゝ」「二人ハ行ゝもゝとさきのゞゝ海り行若人
ある身とゝ豆ゝハ和ゝんいよを多くゝと書くゝその後
ゝ流とゝり化ゝまゝさうゝ苦労もる娘蓋者ハ

渡流堂園貝のもうぶ所ゝうゝんや　作者ある洞庭上ゝて
糸作ゝゝゝ濃ゝゝ形ゝ

角形やもげゝ　ゝゝ順ゝ女

こゝゝハゝて置彼おもハよりやゝ瑞のゝゝ米八丹次郎ゝ
斯ゝまで濃ゝゝ中ゝとゝり強ゝ男ゝゝ継おけば我ゝゝり
ゝうちつけふいゝゝのゝ仕ゝゝゝのゝゝ丹次郎もゝゝ
米八ゝゝゝゝゝ推量ハ彼ゝゝゝやゝゝゝて咽
ゝ乃ゝゝゝゝ成ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ハ〜ア貴のこの方のお長ッ例性来も稀か武士道小路

「おつも」

おもへ〜ア貴注意致し〜て街行エエ〜ア〜ア機嫌成直〜かよ

トいへバおもハ〜ア和漢と月ハ中ふ〜丹波郎の頼成自ら為て治

さゞるやうに左の自に方の〜成ろけて言ハ〜うと言ハ

ゝ〜「お兄イさん」「エ」「お夏さんハ誠よ偽〜よョ

「夏」「夏とハ〜く生れも来ハさんの〜成いハ〜

〜ね無成〜てお知ろ言ハ〜ハ〜ハ〜

ぶりしに力をいれてく二の腕の筋をつめり眼
のうちをすこ〳〵ひのくしてうりこうとうらふ多うりのあい
ら〳〵さ幸ひ性来も絶えうまバ色話とおのづから行方内
接小路より出し接よ編上釜アいろけエリ二人ハビックリ
早黒き左右へまろる剣下ろ拍子ぬ石鹿毛波ぬバ
春の潮汐とけてうまし〳〵き郷〳〵ぞと芝人妹婿の中の石
鞭分小梅の頭上部へ切くまとるかハ〳〵柾の姫
振鼓ぶ〳〵ぬバ人目のなる物乱れ隅ぬまは
此方の軒よ暮るのうわけきあうも我うくとうらふ鳥の
音ぬ〳〵〳〵ぶ〳〵て帰りゆく
暮れ遅〳〵と鶏四方ろ紀　巴兮

第八齣

若鮎や物ぬ根析へ刎く行　義「この二頭ハぶ鮎のぶ鮎ぶ
ぬ〳〵ぶ鮎ぬ鮎ぬ針へかるぬ蠶者や如郎ぶいく〳〵ぬ
トりひ鮎ぶ〳〵横よ門く蔵るとろく米八きえ言〳〵
く二階へまる義「けハ大分山賊嫌ぶの「ハイサ酒でえ

毛程よまつ〳〵だハとこをへておきさまをハトすこ〜鼻であ〜
らひ繪〳〵どんと居る茂八金程酒ぶるまつ〳〵風情を
こ〜調子こるに「ヲイ茂八さん今貝ハどうぞその実が
口上ハ一條接〳〵のふふよ実掛こくよけやうとふうら
ひ方で実ゆるのごいつでも〳〵和〳〵うれる森に門〳〵
ゆそやりやう絵うとゆり門〳〵実ごけてくやうでくふごけやう
ぶ〳〵あんのこつこ面白くも絵人言てぶねくと客の居ト
〜ぶ門うりこをこをかゆつ〳〵をこうをこ〜をる茂さん

あ〳〵小ぶ〳〵をとうけて小舟へ茶うつやうあるくをゆ
日照ぶ表〜〜〜自慢のお守りやうあるくをうゆ出こうあ
きをこ頼賀者ごア「ヲヤこうこいトゆこをこうり家のる
の拵〜寄かり平書か頼付茂をぶ門とせきこ〜茂「ヲイ
あんちうすちう〜こ面アをる茂ト大きか茂をる「の
茂さんのふち門と表門うゆ云てるきこえ表ハあるゆど女
日でうぶ表ア表〜〜〜こそうやアモウゆやくさん方のやうか
様とゆ〜通人とゆ〜いつ人のこと糸私ごものやうに自慢の

とんちきな八男日でりのあさ中に井戸部屋より外へ出てアマア
私が同様うけてやらうとおもへ貧人一人を極へうと井戸ふさ
中に入まつこ二人や中分ふさこ而グト　わの義理の此
義理のことを　ものを勿論　極へやどありがとうこと二個の
人へ義理ガトいひそうさ　其外やりぞう男日でりのあさ
而えト情をとしてうひく考へ「コリ奥
歯ふものくさきうこと　ちはこどの縁一文句でき二
芸居茶さんとくくきうあ何べくあ分　利口

そうるかいやくくい義きのそもうこと上くまよち場
のち門ちきうごられ黄ちとか光る雑と付つ義理と慈
この狭九とうけつくい年乗の長掉を濡して井戸と
場所と稲ちうと意乳地の婦美川へさとあ面後酒
一竹細い元をの糸勤でやうく命成結掉ちやア
ぶまこがか義ぐうあ門このごち限場へ直くさう極ぎの板
よびくあくくくてあ歯ハさう極へせ「の一工養さんいうふ
ろまんぐ　六万坪ぐ近のこの門くわんやうごくとあくべるんどやア

とうべえ


狂訓亭主人

[illegible]

「養さんをまちどほけるやうぶつけども殺しも
おしあんまに事成ることけくいのこのにおまそんの物まア
やごつまくくなのうエ おまつくくを養でまそんまところれ
やうア 私も金程有斜さのつくさのごトやさや「そしてマア
そのの間でも金りやけご 養「十二まんざとうねうふそくことを
ねうをおくに減まをつまくそのるものくも喰潜ご丹
次郎まほおぶくく品やうア根生やをめとりやうも督

吉のさあえ。米八さまをとうそくうんしゃく「モシエ
養さんよりそもかうんをまそのョ仮母もそんか縁らくしい
工成ふくおくまでョ私ハうんとのうまてもいぶらくし
いうとく母さんよ病ぶほいちやうんしゃくとうやも近ろ
ぶーつけご命も捨る私ごこころ今私が殺さまアやア
此所の宅で金のうけごと云ふくおやよこの程
も米八さんご出入城あそまくーくものごと義理と実をか
らまるものハけご門くちまうけるくんとあろうとおもう

てサその時ハ私も仏と共に信女と名乗り成して極楽の新道へ世帯成持ちたいとそのお世話つの[illegible]と共に[illegible]の店賃も[illegible]と愛相ぢうしの[illegible]成るべくそこる[illegible]の悪怨[illegible]よりあの湯[illegible]く[illegible]のごのこのとかさう[illegible]

義「イヤハヤあきれたくものがいと極楽折節[illegible]をあげるくまるの山家の主文義ぶ[illegible]ハ五十と二ツ二ツ[illegible]も[illegible]石[illegible]こるの[illegible]性も[illegible]ぢ[illegible]を安[illegible]ねこ外[illegible]のどこを

着紫合糸の細帯成義を結び白の赤世留の重[illegible]成袖ぐるま持「義さん今貝ハ義「ヨヤらそん

う山ぶハいかとも遠くの文「エイ山ぶハちかと遠く

の緒軟を[illegible]行義「どこへ文「あびき町へ[illegible]

ぐ出るがまことに日本一ときの[illegible]の席が出義「大へサ

義「そのうまくあんまり遠いの「ハイおとうさんあびきに

ト猪義出ると文「アイト[illegible]義ハ[illegible]

義「ちやんヤのりと春かあくちちと[illegible]と[illegible]賀町まで行

て来るなり　文「なるほどそれもやはりこのまア　母「ナニ私がこのように
うるさ　義「まりいうように私が強くがあんでとのことを義理づくで
自分の勝手にあるを義理ハ仏の教でもそれと私でも男の義理ハ
たがいを選ばれぬ方がよいと義理ゆえ苦しゆうて
てもそのうるさい方面ハ生まれぬ其方の不運ハ
うるさいモウいろ〳〵理屈ばかりまア聴くちやんよ
るりとたのもうくるやちんぜう男のおまえたり無理ごと

実ぶが有るもの　母「マア堪忍ゆくの通り機嫌を
直しくるかの　文「且那ハマアのふちかと　母「イヱマア帰りた
まさまをせうあんぜうかの時宜さまく辰巳帰るの
義兵衛さうの仕ようの殺さうの名さえ関ヶ二枚目
ぜ死金銭ばかりやぐまこまるる人とのうまさる星でも
つるりの年ごろうと言ぶ付てこうやちくるいドリヤ
紙くまをうト出さく行男の如業ハが来してそなたべ
くは親兄弟もおよび信切ハ教ゆくれ山ゆと

濃くつくるものとおもひ
もてゐる初めは、そばは系さんのいふにはもとは情から
出来たる門さん大悪の金八とゆへをアノ義さんしきりに
うんざりモウクヽ云んでもまひさい「コウ果八さんあるア
ラヽヽ新しいだつつ中ヽヽちくと耳くまつて来
よ門さんざマアよく不学して見かヨ今の浪花ぶく義さん
の考ふ実まの五人をゆつくりあるめくどやう絶くうを
りくくゆゆくの田へくみとりやうか異見をのの言ハさくく

絶へ考つるもゆくの主やう又義さんの考の激やうれ
法のつけやうがるまよやア絶う「嫌よもろぶんまぶふ
裏ようましいをきんの異見私もものろく思素ゲ
ても「ゲ義さんがのやうくばゆくくゆうでもこん
まそく屋く世話ゆるうさん人あんやりゆゆくゲ表地でうとも
曇敬ゆうくあふやうりう悪成地でまるやう私のめぐマくく
れはまうゆゆまゆくゆうう思素ゲありやゆうトのの折うう
ゆゆちゆゆくゆ果八ゲ逆「ゆうくまゆゆうれ「義さんうナニ今良のう

[illegible]

ん[illegible]へ「そんなら[illegible]ぞおとつさん」女「ム、義姉さゝ業で

うさんなト斬るこゝろへの[illegible]さのやひの舟の解うげん汲

のさゝ[illegible]如才なくのろまゝ中へ業[illegible]高麗がうの

親父役実うら猫のうけびとも用むちる紙宿とゝ[illegible]ぞと

知まゝ風情うり〻〻

春色梅児誓美巻の四終

春色梅児誓美巻の五

江戸

狂訓亭主人作

## 第九齣

[illegible]ん[illegible]もつゝ夜憂中にまさる恨と[illegible]

ゆも似る[illegible]るお花い独〻と姉のお由が留ちの

寂よ[illegible]ひつゝる恋の欲まゝ[illegible]ふ

恋慕の情のいやまさる男のうへと米八が赤形〻しき

有形も元ハといへば金ゆへ古主の業まで[illegible]へ

ごろ少するその風情まこと丹治郎が来ハが足繁く月日
を送るゆへにいとまなく中ぞとへほか告ねど心ゆへ又
捨られぬ時宜ありと思へばぞうぞ甚内より丹治郎
と活業して思案まこと為る門口へ入れぬ若者三人
来へアイ御ごんるゆへ姉さんい留ちろ〳〵ハイ今見ハチト走
方へ出かけまして在宅せんが仕ぞどうぞ御ごゆるしなさう
来へさて〳〵外でも為へ御ごとの姉ハハ女ながらいろく人の
世話代ある為さるが知ろと此所ハ丹治郎を

ゆくまろくあるも主人尋ねてこいと代官所へ
厳しの詮索たくく此宅ハ知れぬ処ゆ近所ハ
ゆくしてあた姉ハ御ごん様ハ知れぬ遠ゆいと為ておいつゝ捕ハ
の役目ゆしおいく為ゆ捕ハ方ハ主人の仕合ゆ
縄目ゆ知ぬ又言ゆ付の仕合ゆ娘姉さん
ハ留ちでもおろへが丹さんの在家ゆ知ぬ居ゆ
来へ〳〵もくどして姉さんも私もその知るお方ハ天十二知夜
るゆがあるゆこゝろもおくへいその丹さんとのひるゆけて別

まくふあつこのが又此帯途中で出会ていろ〳〵ゆゝしを
きつるのまでおもはずくみくぜ一人ぞいてこて三人ばかり
して初めれと強盗いやつ見物がれくそのうちいたいあま
へでもまだ向ておいてもいと女ろ一そ是でも私ハ三人一緒
かくあやつ斯すると三人一度ふ立かりおそとこすくこと表
あらげ三人ヤイとの女アやさくしいそのうちくしいちから
面でまだくと虚をわるすろ芋もちく丹次がゆく表
いとれくと駄ごぞと雪より白きもをふくく捨込さ

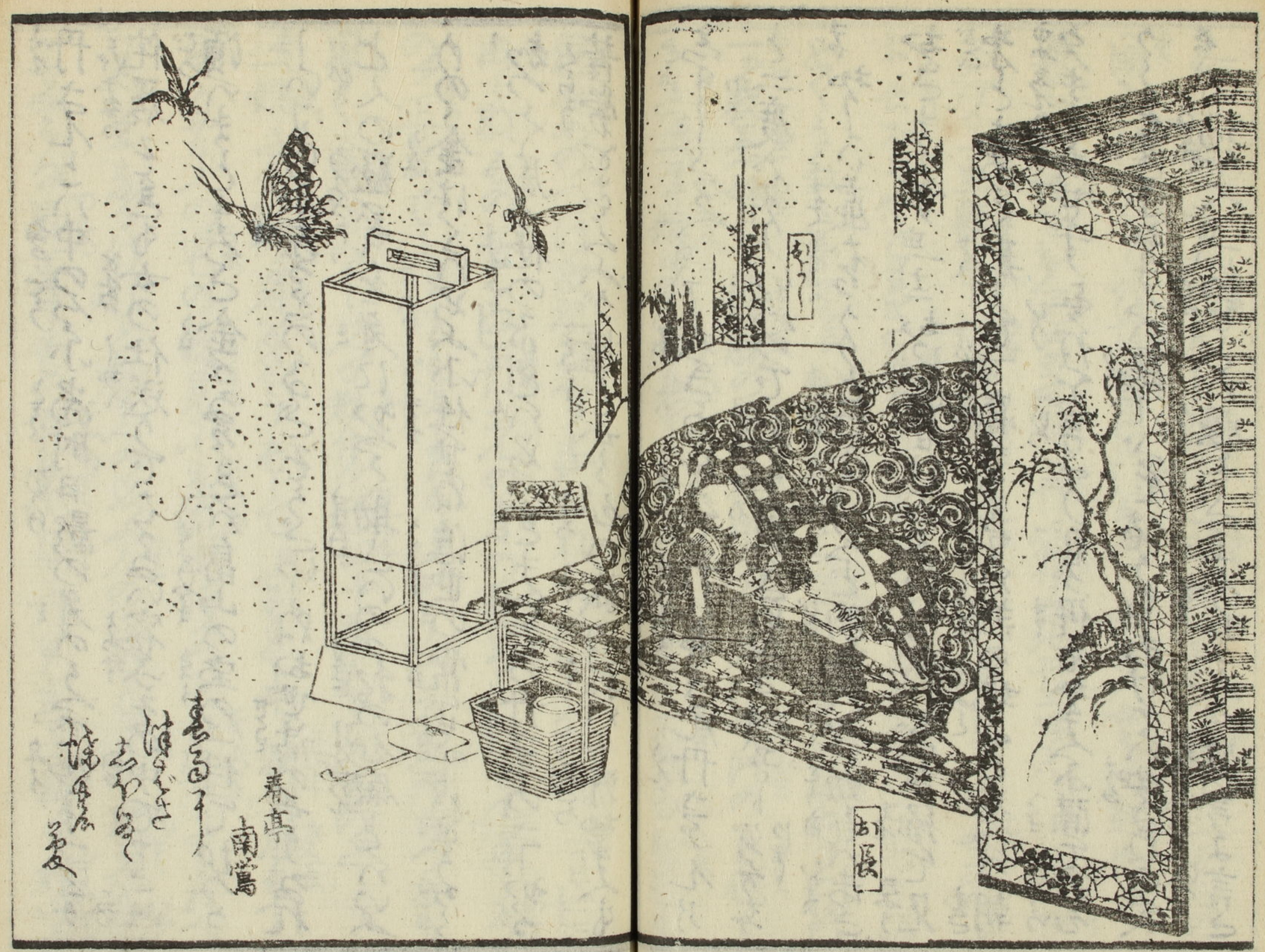
且つく口情淫〳〵アアどうぞ堪忍して下さいまし
三人〳〵そんあ〳〵丹次帯が在家をいくつ〳〵伝と
おのひるさろても丹さえとやつの在家へぞんでません
ていこぞのぞおもしろさろくくぐさいまし三人と女
面さてしても男の在家をいくれくはまべかこいもうべが
もあくも同罪お役人まるがお出がおれべさぞこせうらう
とあくく情ぞおいく表ぞやくくべ情淫くもう
わといやこぞれく見くくお代官さまへ門ぞつく行て

おのれ責めく自状させろといへども夫も今ごく丹
次郎が落度といへば鼻山さるの金の一件千五百両と
いふ大金なぐることで中もち覚えやすい日延もできな
めへ物でもねへそまつが出来れへ日ふまりやう丹次郎へ
街の頭人おもと丹次郎が男を大切ふ思つて金の工面を
きようふとしの入いめつてふまもあへいさとんるなへいへぐる
世話ごさりくきつぐきつぐれへお代官所で言ひけーや
まと無斬やお花をいまーめてしまえとする表の方丹次

郎小縄をうけ村の役人附添へば所の貝殻ーー三人お由が
宅の家をうとんで目まぐるしく頭人が山通りきさらーー枝葉
の者へ追ての山海法その女へう宅へあづけてサラーー表を
とつへ変へよおそへ洞の貝をたーひんれば長きや丹次郎
ハーこまをへ見ふへきのまーめの縄もうーあーー憂ーの助
重ありて来るめっと胸ーーーも取ときさ臭さーーーて懐
の洞ふきある道のせやおちへ出ずたりいですぐりるげ
くを押隅目ーこまーー姉へぐりさりんごきぐ人の側へぐる

くと寄ってゝ已まも因果と諦めさまく聞くおもその
間の村の人ぐの丹次郎をいろ〳〵出来の世ろ〳〵起あがり
もかしこう待ておんるさのより丹次郎さえ丹さまんりと変法
あげる一生懸命姉のお由が変ってお由コリヤ〳〵おもえこと
おもだろうやとまさ夢とこんこのろ目を覚ーるこいそうひ
どくうなさまるらおもさえやと目起さまと目覚そこれば
一ッ夜若姉と添寝の真夜中ってあい冷汗のこれ体と
ちさもまや姉さえ場あってぐさのまー大きるおもでも

まもまーこうこ由ア大きるおもで丹次郎さえ丹さアんり
と二度だろうのこのでもおもこ目ーとびっくり
まもおりの虚だろうとはいのこど胸さへぎ動こへまぐど
おさまーず由土おりとの日ひもあのへまーぐるる縁で見
ずとあるく駆ってーッ寝もコとての蔵の姉ごとろーべ朝
ちまもここ甘ず長行と言ってうコヨぐ程も甘ーこ隔てるこ
うーこまこ不甘ーこ隔ーぐそこうちあけてへ甘さこのぐ
もこまの仏ーこ由仏ーとの寝こぐーこ今甘ーこ寝言ーこ言と


春亭
南嶺

丹さえと二人中のよろしく常時日影の月のうへを歩よんでゐる
俺屋そまも女の仕送りでたくさんの家ふその中でさこ此
頃のまことまつこと金ずるをまとべ島山の室の一件でもがら
しいことけふあるとのうるごそうぐらいなお世話のあうるれ
ど人の恋愛を月にかくく助ことのご私の心願とかいと
りの金ぼくのもとふ任せれ浮世の常ことかうちく
知つく居る他のうをとのもとまいその丹さえのさかる
苦労をとをとふが操と女ふ仏の誠の恋人一所おまへも

思案のつけどたおゆあいろれくトいかまくまくまく

うらく翌夜の明るとなく能舞出るごとらうたけし
私も丹さえの花の咲くよ笑くるあ仏の客ふハ地獄人が亜
小ぐるて表ぐようらうといそまくおもハ婚きも
糸安ぐいる男の身のうくおひる平てくよくと寝まを
耳よ暁の撞もうぞくく待あすを色と意ふ地よ恨り
てハ粋ふ小梅の香ふも似ぞ胸の煙ハ焼竈よ恨る
朝霧ふおきてく勝ふくこち知る折うく空ゆる朝勤めハ
枕中ぐの寿量品おもハまと思ひこむ丹ぞ弟ぐ無

支そくさハ寿あぐまを求うぐく二人一所と量ふる最
こそかハまを世の中の人さふくの物あんど察むのある
人い長まとあれど欲よのこふける西婦の情あーふハ
実の恋の要ハあまをまど嗟人情を推たうまバ人間万
事中庸のねどよくまうハかくもあうる

○つうんの梅ふ咲まるお目門　延澤愛

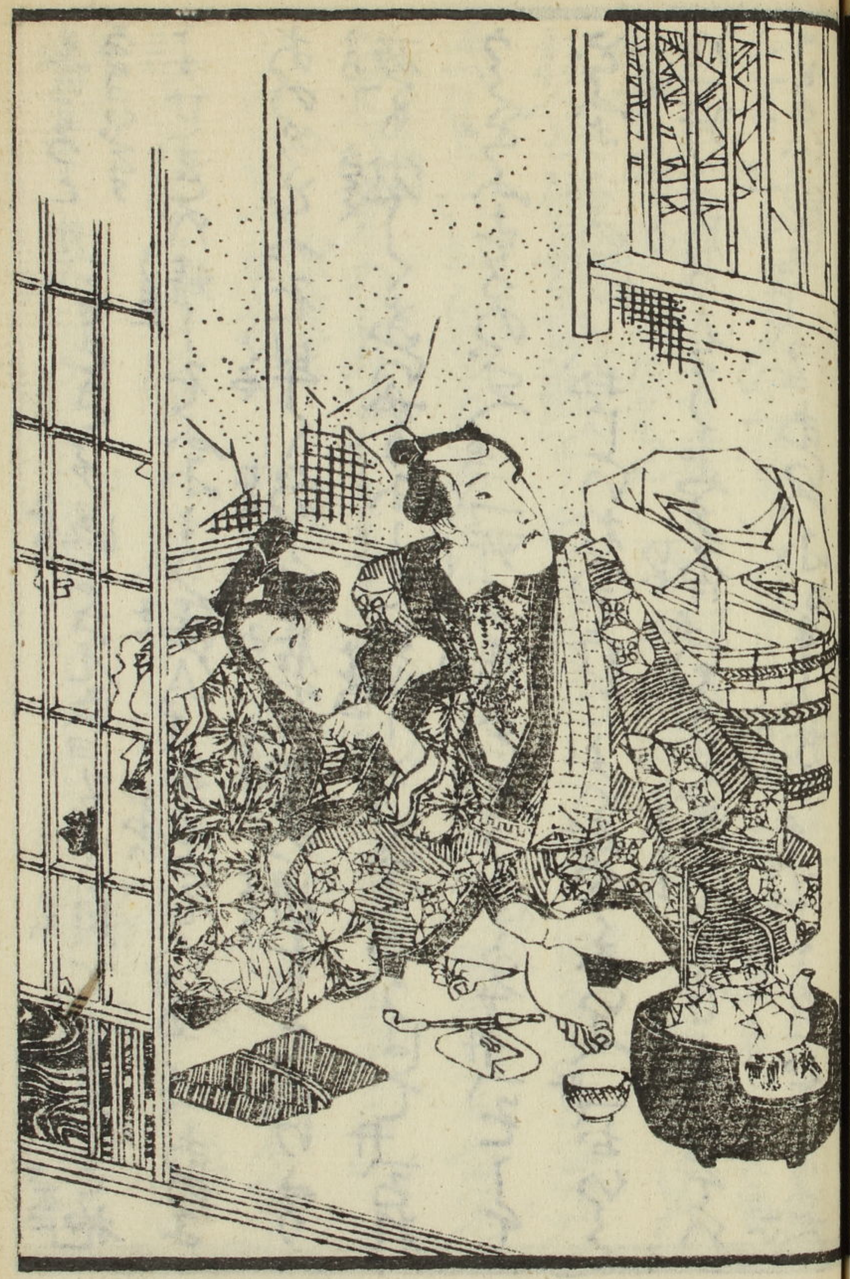
○うらうふまをかぐくん雲の春　松平侯　小松

第十　齣

丹へまや　おせうどうして来さたそう早く来さこうおいう
へ今ばきさこ斗りごこの処へ行といつくそんあふ早く出
て来さこのごと　おせいはをさうるぞう　丹へそうぐそぐすくう　丹へ藏ふもうくどんあふ
いそんで来さまーこうくて　ゆるい　丹へあぜそんるふいそんで
来さこと　丹へあぜといつて　私いまう　おすくそんの　奥をつくる　門
いどみる　苦労で　熱ーくまつてあり　丹へ　何ぐそのう
ふうふ乳よあるのごうあぜ　ゆぐといつく　私いまうゆぐ　藏
ゆきりいやることいい　美ばつんそうふ乳ふあつそくそうへ

姉さんぐ何処ごろ　丹へ　の男のるを　喰そてお　縁ごうう
今朝夜の明るのぐ　待ごうで　有はて　丹へまこのふへ
ばーいるとこいつょ　美ばつんそこいつぐらいでそん　ふ　散よ
さうとぐ　考ぐあうあうう　丹へ　美ばうりどうあいょ　ばうく
さんるんごう　苦労ふるのぐ　有ばるありません　丹へそうさ
そうぐ　ばるとごいふ　其ばうふ　楽ばるるへあいょ　丹へそれでも
私へ　ばのまーこと　丹へ　丹へ　何ふーそも　丹へ　ばうも　丹へ　ばや
そんふ　寒くうそ　海ーいとうつそ　丹へ　ばぐ　丹へ　ばのごと　私ぐ　丹へ

きつ〳〵らくまちすゝヨト　さまあぐり〳〵ごめて　いぐすす　大ぶ箱それぞ〳〵
ぞうの　ぐ　ぞ　ぞ　ぞ



わたくしの身とぞんでもさるとゝ乳でまきえんでありまんにゃそうごけ
まどゝまるゝ不自由よあんまるゝいとゝるゝいゝうぞんぞゝて居まる
て居ても時節自のゝんゝられる所へ行このゝ丹へまぞまゝ
性乳ごまゝぞこぞゝ私ごあげられまく御金成とゝらくく
あげるゝ丹へまゝそりやゝまんごるぞうゝとゝそうふぞゝまして居ゝ
ふそんゝるゝのゝぞゝまゝまゝるゝのうまゝゝそまゝでもぞうでありまして御
金成まゝゝまゝゝまゝゝまゝぞゝまゝうまゝゝまゝゝまゝゝ

まくらもとへ　けてこまさまを　流るさえるヨサラ〳〵　眞を　ふきこのと　抱
ふきこのます
よせまくび　結〳〵　そこへ　ふとう　流ひも　おえさえ　エ　ケエ　も　あのま
あのゥ　どのゥ　ど　早く　彩して　居て　分のうの　困を　してあげ　うう
夜も　泊〳〵　あいあうふして　おあ　ーをいます　ゆうは　て　ケ　それ
うくぐふさろのぐく　も　一所よ　居ることすると　ケ　そして
どふさろのぐ　も　おしいわくそれでよいおうあいく　ケ　おいう
へ一所よ　居うぐうどやう否　も　あぜく　求へさえであくゥそい
ゴるいのエ　ケ　十二　あのふかまく人あう　も　ヨゃうそだうう　大

そうお中ずトよいうせふいろとも　白眼る　さとあはまあのう　ふ
ふまあるゆまおまおずあそよのの　ケ　主　別　ほふ中のいとといふことけハ
とうう〳〵情ふのあたしもう　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
わへぶ　彼ま　世話を　して　自ろう〳〵ろういい　眞も　さま　ま　ま　ま　ガ
も　ゴりいお　自ぐどろういうもうふぐろの二階でおる　ふえ
ぐ　ま　ハさえの　自　ま　ま　ふさるお　自と　言て　そのうへいう
しの　目ふ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ちことのゥ　ケ　ケ　ケ　ケ　ケ　ケ　ケ　ケ　ケ　ケ　ケ　ケ　ケ　ケ　ケ
娘ぐろ　ケ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ

ぐらく〳〵と いとまきとぶんの湯ぐらゐ 廿八 見さんいやぐらく髪が
ちりぢりてゐり
ゑごまとられいけるあいょ こんきとぶらうとを 廿九 ちりく清兵衛
あんるゐ〳〵おいらが 結髪にてゆらう 廿十 結てゆこと
ト こりゃひぐ〳〵ゆきてまこと 廿十一 結てゆらう 糸髪奴うくりく
ぐらく 坊主ふきとろう 鹿豆をもう一ぱんさ 廿十二 わたでもちゃと 良
ゆこちゃうとこ 廿十三 人ゲ恍惚とそうさいぐろ
アとろ由ひげあ〳〵れく 廿十四 見さえそんこうをとりて
ぐるりしてゆくのぐょ 廿十五 ぞんきうふきぐのあるゐ〳〵さ

廿十六 うそぐてよ其の洗吉あのあ和ゆいさらぐりかまろって
ちゃんとこでまあいのめを 廿十七 ぐくゆきりめいあいます
ちゃんとこ 廿十八 ど見くゆ
見ろ〳〵ろうさい紙かまって上あうゆ迎ろときろろのいょトりう
て抱抱藤のうくゆの世 廿十九 おそや乳飲で寝れーる
ヨトりうの 白ってと良 廿十十 アレくをとぐろくあいょといくあ
八色の木頭子さろうとりくあ林ゆてちゃ音どめの
折こそあ 廿十十一 戸ぐろくアとと押あけて入まる二人の破
落戸ぐろくる色八と縁く 廿十十二 次郎おそんゆぐの美ふ

えーその風俗の人ぐるよりとこいろいろ
へくるとかーとする時分二人の丹次郎
と座ー　▲もぐる者の丹次郎　▲ぜうた
るのかまとといつもやアそこがかくれ
いのおやの色形ちくしんぐ貸借　▲てのこるくいやアア
かうう丹ア　イヤモシ　お二人ともかしこまるお言葉かるとふ其
かうの　▲なるほど　▲ほ押ぐ法多く自山さるの宝りのとうぐ
辺で梶原多く賣つけく金の残らずもめへぐ巻あげ世

同ハ分散ぐるといひそ　▲婦多川の妓者を買って
味イたのと宅ゆやとこるかりとつ　▲しい不塩の娘をそき
どりぐ辺で　▲朝ちぐうう千話ぐるひあてまう押ぐもの
うちう　▲へ色男ハなのがあるう　▲ものうふやう丹ぐうが
ある日丹　▲イヤモシと主ハけーうふ　▲とうぐしぐ深屋すう
と古イせうふもおしくれ　▲縄かるのぐ番ぐべ　▲愛
いろイのもとまめくの名代金ぐあけりやアとこいふ　▲ものう
のぐたの代のぐ　▲そんおちまさるふそうもうる

朝霜
海ぐ解や
傳手

めへ。「サア代官所へ引さがらうト丹さんがらうふをとをこべあそこへ
モ「アノお金がいろ〳〵あると丹さんと堪忍するのが出来
ますエ。「サお娘が仲人うそんあゝ二人グロん退して此場
いさるをすきめうりう小判でざろと五十両▲「ろうりふお
娘が一三年おいらんホありやア虎ふ内済丹「イヤ〳〵此子
の義理ある妹ぶしてその招ゐる夏ぶ。「できざア虎ふ
代官所へ▲「エてめんどうごとそれぶ見下ふ「ふとうろうあいうち
ふ丹ぶおそれふ」「丹さんのかりふ
どへぞお待ゐさして下さいま丹さんのかりふ

コとてゲ刑をぶうとをゆしてお金式をいゝ内さいと
やうふして。「ヤくいろぶ信切のめごそうあゝおめへの
ふ。「ハめんどうト「おうがあるまうもの
おまあふのきりの公人丹汪界へうしても
あるさをいへのうの悪漢ふ処動くみトのの天ふろく
ふうすへ「ヤイ盗人ぶも丹汪界やこの娘をうそとする
ふ。「エイ「サア畠山の宝の一件丹「注義いろすへ誉田の涙
郎この近常ぶ人ホへ頼ふね。「エイそんあゝあろくこへ
畠山の丹「ホ中とふるね」ト「あうぶををこべ「

ヤ　わろふ　詮義の　丹次郎　お年の　対面で　人の
詮さく　その方ざのいづまの　京　江戸　貫　温袍ふ
三尺帯　又　丸腰　五分　月代　ハテ　珍らしへ　京風
ぶま　早く　同通りを　退ぞ　人の　ちろ　ねト　てろぢの　麻
ぶぎ　ろ　ぶ　ス　ハ　ぶ　ぶ　ろ　ぶ　ア　イ　と　ま　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
丹次郎　手　方　ま　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
形の　謀判　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
あぶ　右の　金子を　年　ふ　割分　上納　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

格別の　哀悲を　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ようて　内　金二十両　明後日　金　役者　持さえ
いろ世　迷惑　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
上納　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
いとあはいよに　称揚　大家の　藩中　役柄の　人と
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

春色梅児誉美　五了

# 春色梅児譽美 巻の六

江戸　花訓亭主人作

## 第十一齣

鳥一羽濡て出るより朝揆露戎舎〻山茶の客とおもう
て朝はだ元霧屋ゞ家小女すゝひ〻表二階の逗酒ちり
ちゝしる皿小鉢下へ持ゆく〻その跡ふかの婦多川の米
八ゞ元小ゆるゝ恋衣恩小若せるにあらねぼも胸よりと
りく此糸ゞ　モシ　米八さえ　初てその爲り私ゞ自まんで

愚智へいさこの願がけをまつてうそどの禁物と仏よ誓
て切りイしくぞあんきうどやあり イまめくうそりやア成
わど最えの男がのいくぞくふ仏のろ言もあくくらうぐ
強ぞうのくはけよろ私が拾えふ建ぐこと」までふ
たこと信切と頼いくまぎふあり イしてあんきうとやあ
せんう「おいくえエそりやアもう仏と恨とおつこ乗りきー
てもゆーも言ばとんぞれぜきせ今さく私ぐぞのかうに
やてもえ拾へこと言訳らーいとやーいどれありきせう

けまどさくくそりこと訳どやありきせエョ「ナニサそりやア
もう初めうして表れえ貞と潜まる合点で世帯をて
上エーくのぐ私のあやまりでぎまんたくく「そんもう言ふまへ
きーてへ城ふ私が潜きせん実よ多慕さえのお供」
て愛きでまつく慕さえおいくえの所へお出ぐとへ言
ぐこと言きこまでありきすくく門所へ遠言ふ私ぐ身
おいくえエい下へ彩んで言葉こまて堀の舟宿で廻津賀
さんよ多きーて濱の宿へ浪て今朝慕さえのお迎ひ

ごてうおいうんゆもお目よからうとめつくきさま
ら義さえいめめく余所へお出で今モ帰りておきひご
といたまて私ゆどクラーてぞうせうとめつておりま
ちえでございますのをこの一そりやう茶屋元と重ねさ
目まるいとでも言ふ目トもとこの死よ
ありあれとこいはひますせんりまとこ
むのをうぐとしめす始めいい実ての義さえのお最で対俗
小地呼行も遠ちのあいと丹さえとア様へおいうんおきく

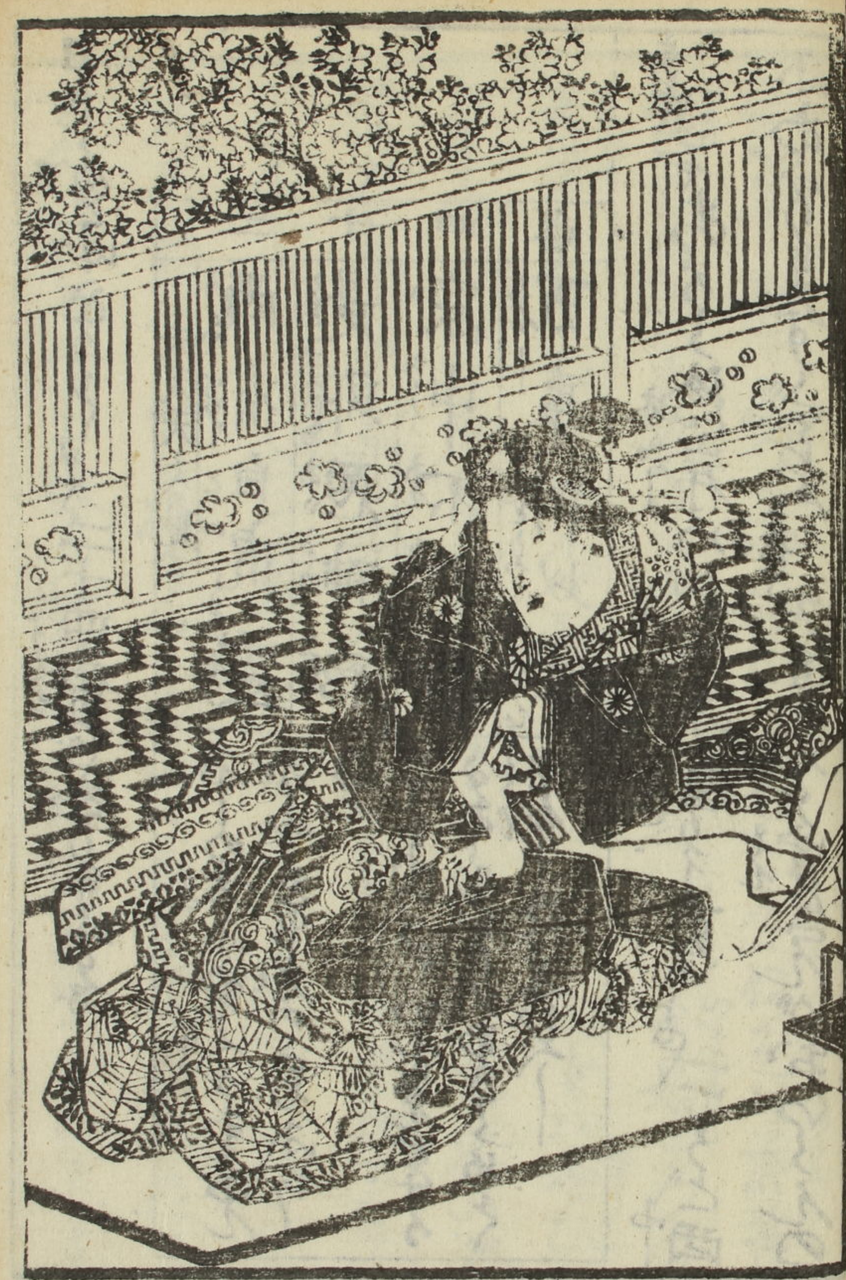
さえのいへいふいまとあはは信切その姉ーさ子引うかいてア
住ところこと義さえ ゲ女小こことを捨てあう小日ちの府義
と茶や舟宿宝へかつまどもお客の義さえをあつかあ方
ぞうう茶屋と思ふの二道を情で塞ぐ恋の責動きの
さまはさー向ひる詰の出合をいろくと別いつも義さえ
へへ吾まるしくはいまてもおいうんへの茶式ちくいつ
はは設つ言ねけまびまこ再宿の亭主さえや相元の変者
元人傳ようまとかへ品とうあぐうモ見ぎうて後とこて

はでハ[illegible]るさうめつと思ふの翌日翌夜勿体ないなど
信切よいそれで着てもいいちまいと返すの出来る沢
でハるしいつも彩が突かつと乾物ばかりの茶とんざひ
色黒も悪もさめたてるあて寝のようしで二度三度
孫子といべこえ見て来てと部やくまでかづひの土産物
自分へ出居れの彩ばけ抱への子供のまくもあつすげ
あくすまとバ已物が増長すると蒲言葉いハ立る脇の
ムーさの初どいべ門さんの貪苦をみつぐおいしんの

情と俺でゆくまとまいぞうぞすぐ[illegible]へ息が七の
出来るあうと倫伽山への月参り妙見さま千扁の
おぐさいのくいくそのヨで浮と親子の強順と導くも
おいしんぱきちんのおれいハ日小戒さびいいるるす
ハありませんぞでで今までのゆうふ記わたふーて
おんるさこハトおんぐくまのまちこの「ゆえふあんー
あやまりイーくこあさうでそうさハ出つくも出ぞろぞり
義さんの見ハ遠ー便アハあーうぐひいまぐぞん

あるべかりけるかなと思ふ人ありや蓋さえの麻ぎんさを
拭ふかなかりのこの人ざるすが風とかがうはくといふ
と其外一図ふちうこもふあるのが蓋さえの特さえ文
でもうとる人私もアアト言て跡といえずもふに此
おいらん髮門ゆ蓋さえの世話ゆいあまでいまごと拙
者のまぶとへせざるのめう〳〵モエトおいらの事そふ
ざまりうとまでつ半さえのうすうとへアイサどうして
ヤイ言こうこの〳〵それざるすうふうふざえすトいらくるあ

めづてゆへゆうこう爲へ〳〵載ふ小寝る所へ乳が法る
言ゆうるうモウいけるのと言ちやアあすせえよあまで
この〳〵おまえでモウちのと拭へ毎うぐて恢えすう〳〵ヤエ蓋で
ありまするトいへ折うう此ふぐ彩造いと花いの花せきと
二階へ来り行つ紙ふ書〳〵物といぐて花へ今お付さえがお
いらんふ出げてこまうとうとうと



ヨトゝもふさゝく　二十四番でありますす子

| 番 | | |
|---|---|---|
| 二十四 | 天天天人地 西有白虎靈 | ゆの方ふあるんがあもあ<br>あぢすあもあるのこあふかり |
| | 是即悪神形 | きこ |
| | 家中不安穏 | たゝふつのそゆんゑんをする |
| | 万事何以寧 | るあゝんあるひあきゝめく<br>ゐんしはゝあひべゝ |

このゆへ　ちゝ　ゝ　ゝ　

きくこゝろおいくんエ古い吉のめつることヤキすろるゝび
おれよりかけるさいまする豆トいどおいくん此糸ハ胸
ふあるうてゆひいる義の山ゆやいぐるの行く浮川
作のあぐまの身そも傾城の狩といふく別つま蒔る
畑もあーこゝる親ろ見ずの苦界の年のうち
色を高ひ色とつゝーこと用ひーても月と日の永い勤
めふ短夜の撞もかぞへて暁を待夜もあまびるぐ
き夜の鶏の音恨む床のうち九分のくるゝこと一分の

樂ことそまこさ男の乳ふよりて尽せー情とあぐふ
きるゆゝくもゆくあるるびあまーといふもかろ
あるー嗟傾城ふ実るーとハ板橋雑記の情ふるさ
らず女郎の終身ハとうきまゝびてこゝこ三十年
の上ハこすともこであぐけるく花ゆふるけのあ
のぐ花ゆて折この風情あるぐ真の契情のこゝろよ
して素人の操を守ると一日を同ぎくしてゆべうゝず
必竟このすへ此ふぐ憂ふの果ハいくあゝんそハ第

三編のもくろみ解べし

著官藤無働此系ぐるふようていはぐ枕評

をすることゝ作者自中より奇境をまうけ

てすきうかさてゝぬこゝろ〳〵べ「米八」「お蝶」「此

系ぐ実情を三幅対とし〳〵こゝろ新奇のる

所あり発市の目をまぬかれぬのこ

第十二齣

八重といふ工女間ふ逗〳〵梅の花咲〳〵る時へあり

ぬぐ〳〵まぐ春風のさそひずやおもいとひの市ごろ

初つくるゝ〳〵き今日の月ハ明の丹次郎が〳〵あふ

ふ奉ぶ出仕召る浄瑠理語とあり其の器も

竹蝶吉と呼ぶ〳〵月待用待〳〵招〳〵鳴の浦

ろり夏きるゝ〳〵そも寅芝方が丹誠ふ仕あげ〳〵

藝の間わぎよく〳〵嶋田の黒髪をきろて男に

対情が今世きるゝ美花髷化粧を〳〵美〳〵さ

二階の窓よりぬ〳〵ぬ〳〵今宵よぐ〳〵〳〵お客の好

出ての後ふく一ぱい

なるく婦人の事ハ物まうでも配偶者ハ
そのやうぶかさをぶくの仕方きこ時ごろの呼ーや
るせも合ひひとりをいすこまたのもとうあるさぎ
ふぶとさふぶかりうまとあ仕合ハはまんできこの
ぎやうハのうとまんぎよさきふたが配合れもうり
一ぱいそまふたをとれハるんどうふもおとあいだ

又せびらとうまるさたうさ人の婦人ハ何が能ろ
くみてもまあ沢ハあけまぶ子種ハ問ハおもうにを
らぶぬまんでありとうを用ひあとでハ重に多をぶ
てさのどハおぶせた種ハ井タうまあきあ
配るかをこそこうのとまうの食まこう
ふやるあるかハ小柳ハ身もせもあるまぶこそ。そ
世ハ紙ハ沒ハ沒ハ沒

此家の主人老女ゆゑお阿といふる妻婦あり元ハ
お兵が実の親唐琴屋の二階よりはとめし客を
たらしが強欲非道の曲あるゆゑことづゝの金
より利をむさぼる今ハ如くゝ雪の下寮防ぎ
ちらいふ借宅して音曲の子供をかゝ渡世
とせしが此世ハ手者のくらべくるよ恨を
とりくさのお蝶と二十五両ゆゑかく諸家へ立
いゝせて祝儀をかゝ生活業とへいとすあり

この金八丹ばかり
おとりしとぞ
お兵ハ以前つひ寄りを
母とかしづきくその門抱ハ主人と知ると朝夕
にぎさまく呼らくに借さ多請の金といひ
ゝ抱へらくかりうふ不足ぞとかづざりし
あへ家のかりゑとまくずしてそのめしつひ
同ぜんふあり手運の拙ゑのさを日夜ゑ歎く
もものび涙あの主たちゝ世の中ゝりお阿老
女ハいゝつぎまくく階子の段をこゝきゝ

く蝶高く飛つんぢうめこうお蝶

も「おとびく」な「いかげんふ空耳をたくらうせエ

つんぢうめエ」も「ヲヤさろぢう」初まーあんざ多

モウ九ツグ鳴くアナいうびんにーく支度をれく

うる森くーい」も「そもそでも今日の出ものハ私

グ苦くつけれくものごくよく後つて行くと

こまるものヲ」な「ヲいくれくすうにがかられく

でおるときくさくくといくのふちぐーて

居やアがつくお屋ーきくいるとろ座ーたがある

とろいくと足元くく鳥の立さかうふきくぎやア

ぐくアなでもみまとくく森よーてみるくくざア

仮ふも親ざざあんまりは返答くーくヨガ

保ガきくいきてくかうふなかもいくれく

きんぢんをさくるいくぢうでるめくの芸ぐら

いで二十の三十のといく金の利合もをるのめく

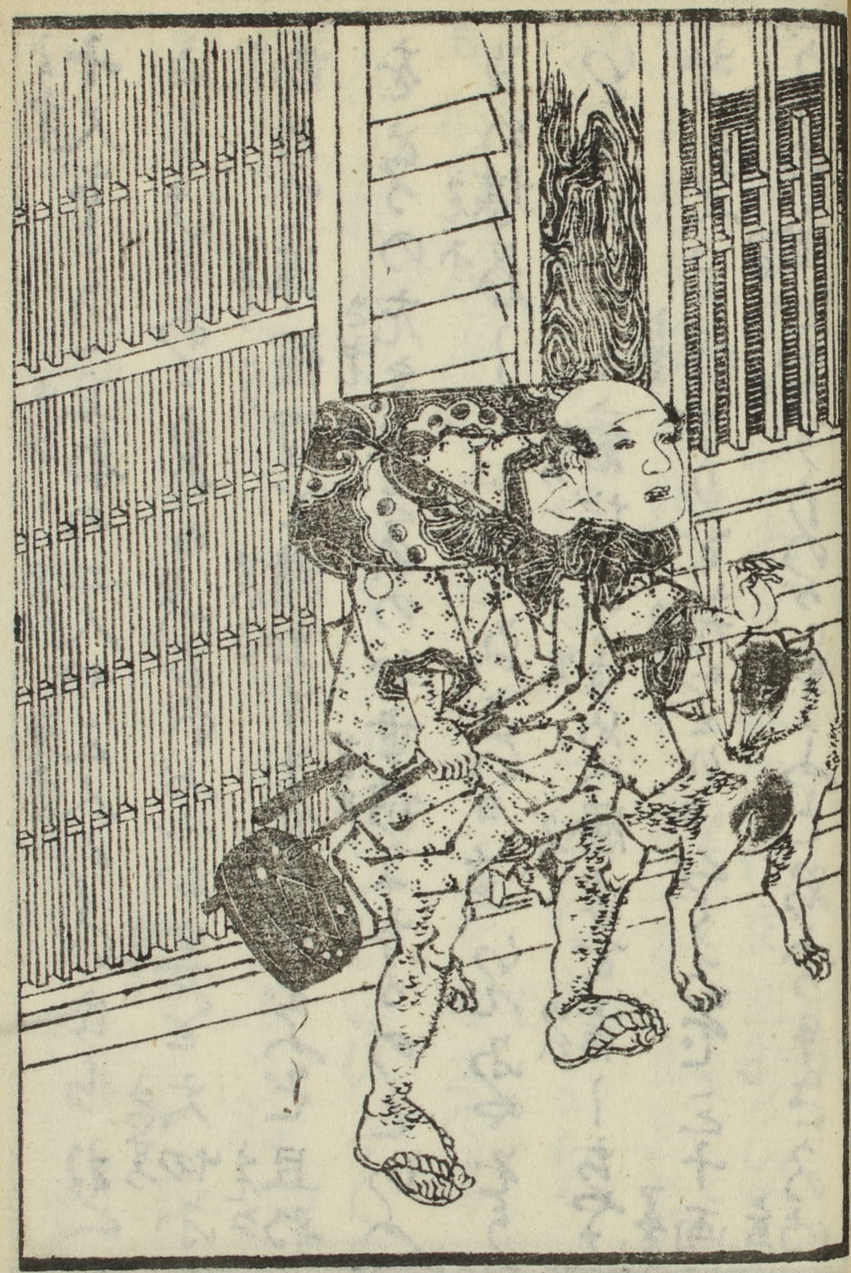
そまざくく尤文太さるグトいひうけてたーごを

あごをおちが例ふすりうあ〳〵こうよく笑る吉ろ
尤文太さあハたそうに四門福ごといへるハ
万長でも笑さどやうれへうそうい人金のちが世
話とーてやらうといとロ当るのを今のうて逆
ろもせず。きゝんごもう洞ぐれで居るのうがう
かるいいがく毋いのご不吉あるもイ立今年で
凌つく居ると長吉殺しの所があハまごうツイ
洞ぐが出とんでありますあ〳〵フウリあめで語て

多めてかるーいのうぞへそ笑人がその半ぶん
情のうりくあうあいが廣場へ出して押あハ
ーとうだぐらーとくるる連も出来めゆー
小ちくかてまとう笑人へあびて洞ごらう
まごーも目鼻ぶちがまんそくでこの白い
ぐお仕あハせそれあへ彼是人さあがこまゆ
言てもんごさるのご蛮で立流あ方形ハ出来
れへとサかういへのもやめへの為ごがの今どき

竹蝶吉市変化

石さま



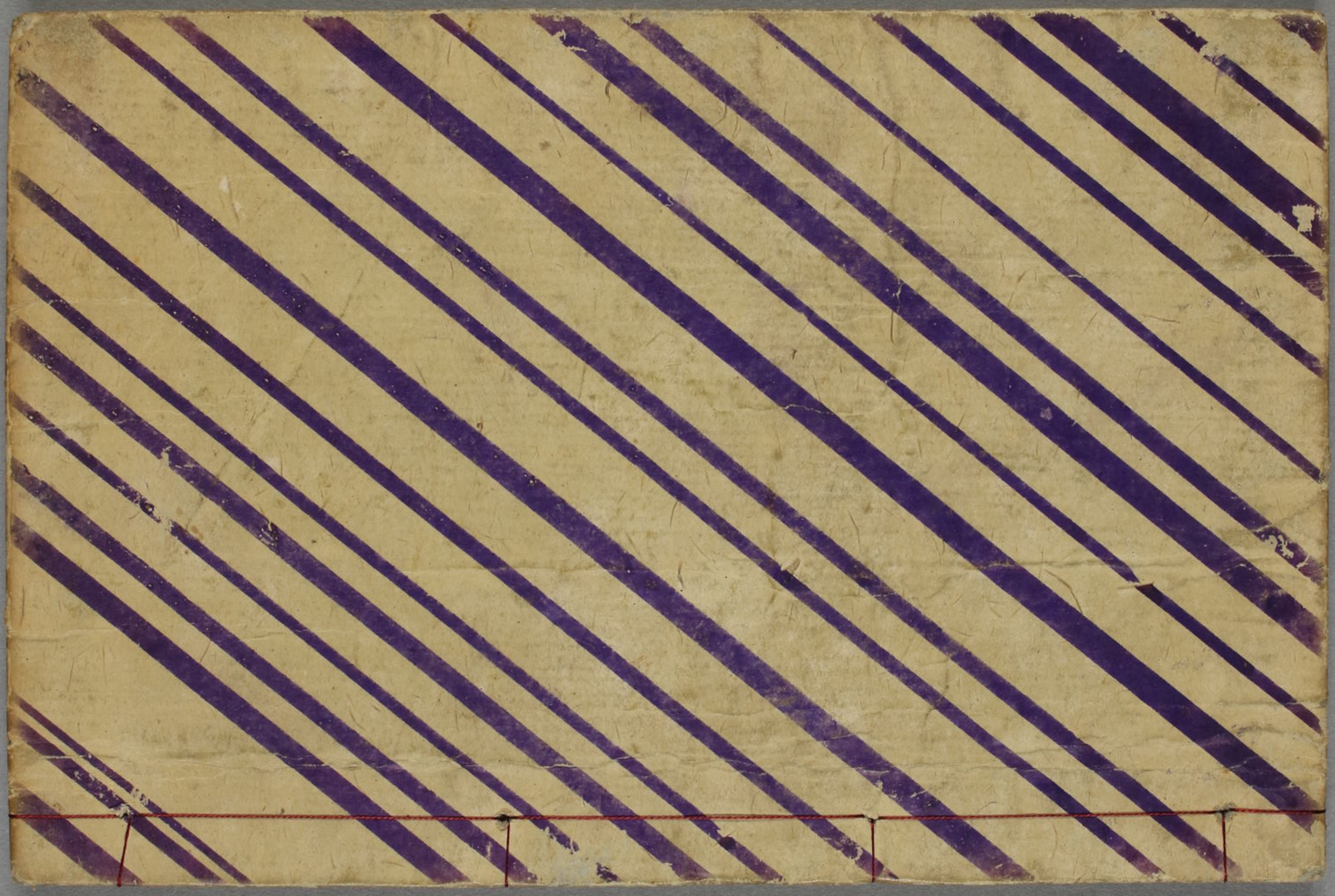
十人ばかりで且那の二人やこ人ぐらいきられく
ゝとけがあるものゝもしどのおんお客を大切ふ
勧めて淨瑠璃を精出しーませうがどんぞ且那
をとるの左文太さまのおお世話よちるのといふ
るの堪忍しておくんるさいヨ。えいんあやそう
いやア此方も言ばざるめん勝ふを言ーちゃ
ばかりわへコレ淨るりと舞ふとはうぐらゐで三十両
うゝの金を出すものがあるゝもとめうまきうの時

の用ばかり受ちてある二枚の絵文且那がいや
あゝ恋ゞ寝の部へかりて年一ぱい生涯一故
くんのうちこの中で苦界をするも亦ようらう
且那へいやざるもふさゝーしいアレサ母さんモウ
よへこれ出ゞけふ出ますへが小言をおいいぶし
乳にかゝゝ出ざゝきの機嫌もとりゆくいヨ。
にでうーやるようゆゝの往ぶどしいヨ。ヨウ小
言をいへと激しゝと身で居ゝが大かゝ甚方の腰

の中ぢゆう元主人どいふ気ぐらうがそりやア
あるゑど六七年いぜんふたゝゝ一年わどよんで
こゝろあく新まちく唐琴やの女郎衆の世話
して居と時もあるこゝが行も幸公人とまるて
勤めて居やアゝわへヨく行すぎて昔がこゝろへ
りのうへすゝ私がそんなるとゆうて居ると
ませんとこゝろへいどゝ仕ようとしてもい
あるりなうお河が雑言始と乳よ通うるこゝの

たゝゝゝ折ゝゝ表の格子戸あけ武家の使こ
こへこゝる男へイチトおたのこゝまゝ梶原の中さま
ゝゝ参りまゝと蝶吉えの迎ひでござりました
ゑへハイゝこゝまへ大きゝふ芸者ヨ蝶吉
たゝゝく支度をゝわへうこゝアお茶でもあげませう
今日ハお客さゝハたゝいさゝでござりますう
仮へエイお客よりゝ芸者ゝうの方が沢山でござり
ますす
桜川善好 桜川新好 湯又話家でゝ

龍調ふ桁橋清元でハ志ほ太夫ふ寿女太
夫延津賀踊アとでハ西川扇義義太夫ち
此方のお蝶さえふ小でん仏でもアア大さうさぎ
さ子多へまゝくそうやアアアおのしろうらうれ仮へイやく
きごあるへへおゝが且那のぴいきの婦多川
の米八梅次トいへおりうゝお蝶へちくゝして二階
ようおりきうりこ五二を出ちくゝ米八さんとあう
もお出ごとろへ多アアそんあるときくゝより

りうきとのでもれへやうふゝろさあうあゝモシ
ぞうぞお那ひゆきます〳〵余所のふ若と
遠つくゝこゝが付れへでとりゝ切ます仮たサお母そう
言ふさえる娘子共のできゝろへろいおぢこゝ方が
かりとゝゝくゝてようどぞりきますサアゝりやせうゝ子〳〵
いゝてゝまります仮〳〵さあうあゝイやぞうで今日八盆
夜ふありまるョ多〳〵それへ有ゞゝふお蝶ゝをつけれゝョ
ゝ〳〵と出ゝ立風俗へ梅我よまさゝ愛敬良へ上ゝ品ゝとで

京清七子上羽の蝶の菅笠後下ゝ岩八崩地紋ゝ大
きく染一丁子菱縮緬の袷八白綾ゝ朱紅で書画
の印ばく袖へ緋縮子帯八まゝ黒びろうどゝ紅のまま
のくゝ仕立ゝ帯も同ゝくろ三ツ打ゝ[illegible]の腰帯八
あんど白茶の金すうゝ物論巾八一寸三ツ五分でも透ゝ流
行ゝ形ゝ色ゝ模ゝ岩ゝ花ゝ鶴ゝ亀ゝ姿ゝ模ゝ蝶ゝ
ゝ引ゝ入ゝ つゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
春色梅児誉美六才